
インフィニット・ストラトス = 片翼の墮天使 =

御神 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス Ⅱ 片翼の墮天使Ⅱ

【Nコード】

N7065Z

【作者名】

御神 司

【あらすじ】

何処にでもいそうで、何処にもいない。そんな印象の少年、浦河柊は、ある日を境にかつての自分を取り戻す。傭兵として、汚染された大地を駆け巡った、あの日の自分を……………。

P t 1：復活

「へつくしッ」

クシャミが出た浦川うらかわくぬぎ桐はポケットから携帯ティッシュを取り出すとチーンと鼻をかむ。そして使用済みティッシュを丸めると近くにあったゴミ箱に放り投げる。結果、ピュウッと吹いてきた風に流されものの見事に外れた。

そのままにしておくのも後味が悪いので、ティッシュを追いかけて拾うと、今度は直接ゴミ箱に突っ込んだ。

寒さに身を震わせ、ポケットに手をつ突っ込むと浦川は再度歩き出す。

浦川は、何の用事も無く早朝、しかも寒い外を出歩くような人間ではない。今日は高校受験の日なのだ。そうでなければ恐らく浦河は今頃温いベッドの中でまどろみに浸っていたであろう。

受験する高校は私立藍越学園。

浦川が何故この高校にしようと思ったかと言うと、彼の父の友人がこの学校のスポンサーをしている企業の社長なのだ。一時期、就職の氷河期とも呼ばれたご時勢でないにしろ、少しでも就職できる確立は上げておきたい。

「寒い……とにかく、早く受験会場へ」

中学三年になってからの猛勉強で模試での判定はA。普通に受け

れば受かるレベルだ。それでも緊張は拭えない。白い息を吐きながら僕なら大丈夫と自己暗示をかけ、いざ出陣する。

その結果、

「いかん、迷った」

迷子。十五歳にもなって迷子である。

そうは言っても、この試験会場のある多目的ホールは迷路のように入り組んでいる。それに、所々無駄な設計も多いのだ。恐らくこのデザインをした人間は「俺に常識は通用しねえ」とでも言いたかったのだろうかと浦河は考える。

だとしたら随分と厨二な思考の持ち主だ。それに多目的ホールであるのだから芸術性よりも機功能性が問われる筈。本来ならこんな入り組んだ構造はご法度である筈なのだ。

（設計者が偉いさんかその子供とかだったりして）

嫌、今はそんな下らない事を考えている暇は無い。早く会場に行かなければ、受験を受けてもいないのに落ちる可能性がある。それだけは何としても避けなくてはならない。

「あ、あの」

声を掛けられたことに気付き、浦河は後ろに振り返る。そこには黒髪で、自分よりも頭半分くらい背の高い少年が立っていた。

「君も藍越の受験生？」

「ああ、そうだよ」

「やっぱり。俺、織斑一夏っていうんだ」

別に名前を聞いた訳ではないが、名乗られたからには此方も返さなくては失礼だろうと思い、浦河は口を開く。

「浦川桐だ」

その後、浦川と織斑一夏は二人して受験会場を探すべく、ホールの中をさ迷い続けた。

しばらく歩いていると、何を思ったのか浦川が立ち止まる。

「さて……」

浦川はフウと溜息を吐くと、一夏をジト目で睨みながら呟いた。

「ここは何処だ？」

「あ、あははは、はは、は………」

返ってきた乾いた笑いを聞き、浦川は再度フウと溜息を吐いた。さらに迷ったような気がする。この織斑一夏という少年に着いてきたのは間違いだったのでは？と、浦川は心の中で三度目の溜息を吐く。

「つ、次に見つけたドアを開けるぞ。それでだいたい正解なんだ」

そのギャンブル性の高い賭けには乗りたくないとも思ったが、今の現状ではどんな手段でも良いので受験会場に到着したい。あまり気は乗らないが、この少年に着いていくしか方法が無いのだ。

一夏は調度近くにあったドアを開け、中に入る。浦川もそれに続く。薄暗い部屋の中心には、騎士甲冑にも見える、機械仕掛けの鎧が二つ鎮座していた。

「これ、ISか？」

「みたいだね」

一夏の呟きに、浦川は興味もなさげに答える。

インフィニット・ストラトス、通称IS。

天才、篠ノ之束しののへたばねが開発した宇宙用のマルチフォーム・スーツだが、その性能に目をつけた者たちにより軍事用パワードスーツへと変化した。その圧倒的な戦闘力は従来の兵器を時代遅れの鉄屑へと変えてしまうほどのものだ。

しかし、その圧倒的な性能を危険視した国により結ばれたIS運用協定『アラスカ条約』により、ISの情報開示と共有、研究のための国家機関施設、軍事利用などの禁止が決定され、スポーツの道具として扱われるようになった。

（もつとも、どの国もISを国防という建前の下軍事研究を行っているが）

しかし、ISには致命的な欠点があり、その事から二人には何の関係も無いものなのだ。

「男には使えないんだよな、これ」

「・・・・・・・・」

そう、女性にしか使えない。原因は不明だが、ISは女性にしか使えないのだ。製作者の篠ノ之束も原因が不明と語っているそうだが、定かではない。

「ここにも時間無駄さ。早く会場を探さないと」

ISがこの場所にあるのは、恐らくIS学園の受験会場もこの場所なのだろう。

だが、ISの事などどうでもいい浦川は一夏をせかすように言う。

「そっかそうだよな……」

一夏は目の前にある最強兵器^{マネキン}を、目を少し細めながら触った。

「!？」

その時、一夏の目がカツと見開かれた。その瞳は、何か訳の分からないモノを前にして混乱しているようだった。

その様子に気付いた浦川は一夏に駆け寄る。

「おい、何をやって」

「分かる」

「は？」

ボンヤリと呟く一夏の言葉に、浦河は思わず声を漏らす。

「おいっ！そこで何をしている！」

その時、ドアがバンツと開かれ部屋の中に数人の女性が入ってくる

る。

突然の声に驚いた浦川はもう一機のISに触れる。

（！？ なん、だ・・・コレ？）

頭の中に直接流れ込んでくる、おびただしい量の情報。今まで知らなかった事が、まるで長年熟知したものの様に、修練した技術のように、全てが理解でき、把握できる。

そして、ソレとは別に流れ込んでくるモノが、浦川にはあった。

《こ・・・り、・ロ・・・ランをかい・・・》

《しょ・・・、・でにい・・・》

今まで聞いたことが無い筈の、男性の声。しかし、何故かそれは酷く懐かしいモノに感じられた。まるで、遠い昔に読んだ絵本をもう一度開いたかのような、懐かしい感覚。

（これは・・・この声、そしてあの風景は・・・）

そして浦川は思い出した。声の主、そしてあの風景を。

（そうか、人は宇宙^{そら}への扉を開けたか・・・最高じゃないか）

蘇る、遠い日の思い出。

(なあ・・・テルミドール)

この日、浦河櫓の世界は変わり、そして蘇る。

＝ 続く ＝

P t 1 : 復活（後書き）

反省も後悔もしていません。

感想とアドバイス、誤字・脱字指摘、待っています。

P t 2 : ババ抜き（前書き）

少々、お粗末で申し訳御座いません。

P t 2：ババ抜き

アライアンス、日本支社の中にある部屋。この場所で、四人の男女が丸テーブルを囲みながら椅子に座っていた。

「まさか、あなたがISを動かせるとは想像もつきませんでしたよ」
(ム、ババですか)

ソファアに腰掛ける二十代後半程の男性は左隣に座っている少年、
浦川うらかわ桐くみぎの手札からカードを一枚引き、溜息を吐くように言う。

この男性の名はアディ・ネイサンと言い、オーメルの製品販売海外部でかなりのキャリアを誇っており、彼が宣伝した商品は必ず売れると言われている。

「ええ、自分自身でも驚いている所ですよ」
(ツチ、揃うカードが無い)

浦川は隣に座っている女性の手札から一枚引きながら、言葉とは裏腹に落ち着いた様子で言う。

ISを動かしてしまった後、浦川の家にはマスコミや企業のスカウトマン、研究者などが押し寄せてきた。昼夜を問わず、問答無用で話を聞かせる、是非ウチの企業の専属IS乗りに、君の生体データを取らせて欲しいなど。

(ちなみに、最後の研究者には先進国における素晴らしい権利『人

権』を盾にして丁重にお引取りしてもらった」

どうしようも無くなった浦川の父は友人であるアライアンス、オメル・サイエンス派の社長に息子を専属のIS乗りにするという名目で保護を訴えた。アライアンス側としては願ったり叶ったりであつたので浦川はすぐに引き取られ、彼の家族も誘拐などをされない為に保護してもらった。

「お前には驚いている暇などない。男だろうがISを動かせるなら、使えるようになってもらわなければ困る」

（フが揃った。あと一枚・・・リーチだな）

浦川の左隣に座っている黒髪の女性は、隣にいる男性の手札からカードを引き、揃ったカードを二枚捨てながら言う。

彼女の名はセレン・ヘイズ。アライアンス、インテリオル・ユニオン派専属のIS乗りで、かつてISの世界大会『モント・グロッソ』優勝者の織斑千冬おりむらちふゆと優勝の座を懸けて争った程の実力者である。その激戦は、未だ人々の記憶に刻まれており、織斑千冬の『ブリュンヒルデ』と並び『ミストスケグル』と呼ばれている。

少々荒っぽい正確で、戦闘時には若干トリガーハッピー気味との噂もある。

「まあまあセレン。焦って無理にやらせるよりも、ゆっくりと確実に経験を積ませた方が案外近道だとおもっわよ」

（ゲツ、ババ）

（運が有りませんね）

（ババはメイさんの所か）

（スマイリーの所か・・・）

浦川の正面にいる長い髪の女性は、彼をフォローするようにセレンに話しかけ、アディのカードを引き苦虫を噛み締めた。

彼女の名はメイ・グリーンフィールド。アライアンス、GA（Global Armaments）派専属のIS乗りである。実力はセレンには及ばないが、ミサイルを主武装とした第二世代型専用IS『メリーゲート』は安定した性能を誇り、タッグを組んだ時の戦闘での評価が高い。

感情が良い意味でも悪い意味でも表に出やすく、それ故に大体の人間からは好かれているが、彼女自身が損をすることもしばしばある。

ちなみに、彼女のスマイリーという愛称は彼女のISに描かれたエンブレムに因んでいる。

「そつえば、お前。IS学園から来た参考書は読んだのか？」

嘆くメイを放っておき、セレンは浦川に尋ねる。ただし、細められたその目は読んでいなかったら殺すと言わんばかりにギラギラと光っていた。

「さ、流石に全部はまだ読んでいませんが、四分の一程は・・・」

「

「ふむ、二日経って四分の一は遅いですね。ま、あなたならその位が上出来でしょうが」

（ふむ、あとリーチですか）

「アデイさん五月蠅いですよ」

若干殺気に押されながらも、何とか声を絞り出す。そしてカードを引きながら、小バカにしたような口調で皮肉を言ってくるアデイに文句を言つのも忘れない。

「そうか、なら良い。ただし入学するまでには全て読み終えておけよ」

「り、了解」

（あ、リーチ・・・）

「あがりだ」

おずおずとセレンのカードを引きながら浦川は思う。やはり世界が違ってもこの女性は恐ろしい、と。

前世の記憶と言うべきものにも、セレン・ヘイズに関する記憶はあった。ある日、入団してきた『首輪付き』と呼ばれていた彼のオペレーターで、しょっちゅう彼を正座させて説教していた。更にオペレート中にも、般若でも逃げ出しそうな過激で辛辣な発言ばかりしていた。

浦川がこの世界で始めて会った時はとても驚いたが、それでも彼女は彼女のようなのだ。以前、ISの訓練中にヘマをやらかした時には

二時間程説教をされた。そして浦川の中で、セレンは『逆らってはいけない人』になった。

「ま、まあ、柵は柵のペースで頑張れば良いと思うわ。私も、出来る限り手伝うから」

「あがりです」

（結局、ババが残っちゃったわね……）

メイは溜息を吐くと、眉を少し吊り上げ、キッと浦川を睨む。しかし、浦川は全く動じないどころかクスツと笑ってしまった。

「ちょっと、何笑ってるのよ」

「いえ……」

（メイさんって何時もは年上のお姉さんって感じだけど、時々小動物みたいになるんだよね）

浦川は上目遣いで小動物のように睨んでくるメイに癒されながらカードを引く。そしてそのカードは、

「あがりです、ね」

引いたカードはハートのエース。手札にあるスペードのエースと合わせて浦川のあがりだ。

メイは手元に残ったジョーカーのカードを握り締めて頂垂れた。

「それでは約束通り、敗者には昼食を奢ってもらいましょうか」

「すまんなスマイリー」

「うう、今月は金欠決定かしら……」

この四人で集まった時にこのババ抜きは行われる。上記の会話の通り、敗者は全員分の昼食を奢らなくてはならない。浦川自身も何度か奢らされた事がある。特にセレンは常日頃から凄まじい訓練を行っているの、見た目からは想像も出来ない程よく食べる。

（だがその身体は女性を捨てるようなモノではなく、力強くも美しいという反即じみた魅力を持っている）

メイのことを気の毒に思った浦川は声を掛けた。

「あのメイさん。自分で払いますから、僕の方は結構で……」

「ありがとう櫛。貴方って紳士的なのね」

メイは涙を漫画のように流しながら浦川に感謝する。

その様子を見ていた二人は、フツと鼻で笑い、ハアと溜息を吐く。

「まったく、敗者に情けをかけるとは。あまり長生き出来るタイプではありませんね」

「存外、甘い男なのだな、お前は」

その後、四人は雑談をしながら食堂に向かった。浦川がIS学園に入学する、一週間前の話であった。

「続く」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7065z/>

インフィニット・ストラトス = 片翼の墮天使 =

2011年12月25日20時56分発行